KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

ル 4
2068
1

今治夜話

全部

1L4
2068
1-3

門 儿子4
猫 2068
1—3

15
1256
1

今治夜話卷之一

戸塚政興樣

安心樣御八歳之時駿遠州掛川城後
權現樣御篭之為御拜領江遊来節戸塚助大夫和
田半左衛門御供之
御前へ法出之事和田家之記録に有之
於之小泉宮勝拝来都旅宿物語有之
按世人　安心樣御代とゝ今治之御家御初
代美作守宗房樣江遊御隠居今治へ之御旅中
於摂州大坂御難儀江遊之節　安心軒樣と此

御事也此頃ヨリ代新号ニハ常ノ字ヲ称ス
安忠様ヲ　ヲ唱ト見ヘシ　二代目助大夫ヲ歌
ヨリ御ノ字　安忠様トノヲ御ノ字
安忠様慶長九甲辰掛川御誕生御初名
千徳様又長吉様一説ニ長松様ヲ　後ニ
主膳様ト号称ノ字ヲ慶長十六年辛亥御八
歳掛川城
東照宮御鷹狩ニ御旅館ニ御時也
戸塚ヲ助大夫改次郎年十一歳也和田ニ居宅
ヲ御伽ヲ勤ノ者成ル故ニ　御先祖様

御年ニ時ニ御事ヲいひ
権現様ニ御事ヲ御伽ノ者ヲ召れい是ヲ以書の初
ニ記ノ要ヲ
○小泉ニ先祖ヲ姓伝ヘ長濱ニ住ノ特ノ人也
ヶ浜水ヲ〆二階住居ヲ一夜明テ見れい家
ハ我屋敷の数の隅ニ逝ク生ノ人ヲ
按寛永二乙丑四月十一日
定房様初ヲ勢州長島城地七万石御拝領同十
二乙卯七月廿八日　御金元御二代目ニ
松隠州定行様後桑名十一万石　京　遠御拝領同ロ

定房様後長濱城七千石豫州今治城三万石遷御
拜領をもつて長濱十一ヶ年間寛永四丁卯淡
水国十一郡成淡水者なり
○安心様御威光を以て大御台所居を遷
御郭一時成日に御下城に於
御立国御器量を以て諸人解なり御充中酒井雅
樂頭様御心付を以遷御器量を以て解なり
御待なり成り御ひいきなり御自雅
して江戸遷しなり此なる御坊主弟諸家に御使に
最も見受なり公儀世形勢の為なり成酒井

様の朝なり成成遷御方様成なり夫より
世上なり崇敬なりなり世上の光の様御なり
山なり
按此酒井様
安心様に御姪に御續に御
父酒井四品阿波守忠行様の御室
此方様の御妹女なり御子雅楽頭様侍四位
忠清様に世に下馬将軍と称なり
○公儀御城鉄門見附に大石内蔵助と称
なり成郎の工夫なり
江寿者なり

按岸城鍋張一ッ助左衛門ハ何と此石一
ツ之右と殘さんや立夫の〻ものハ何〻
若ハ献上石ゆゑん。
○渡部四郎左衛門先祖ハ　安心橋御鷹匠ゆゑ
横村御出右一ッ呪縛の中ゆゑ五六才の男子ゆ
服差〻ゆゑ迯出居ゆゑ　御尋彼ハ何
者ゆゑ成ると御尋ゆゑ成一ッ村役ゆゑ
の二藤堂和泉守様家臣城部助左衛門ゆゑ御召
ゆゑ此所ゆゑ一ッ妻服ゆゑ何某ゆゑ
ゆゑ男子ゆゑ人ゆゑ御左衛門。孫ゆゑ

ニ付家筋ゆゑ者ゆゑハ成長ゆゑ　御召捉の時
ゆゑ彼ゆゑ本方ゆゑ養育致一元四ゆゑ名乗ハ
名出羽何某ハ本五ゆゑ迯ノ名誉ニ名仕立一ッ本
五ゆゑ進勢ゆゑ時本屋ニ名績撃ゆゑ名誉と將某さ
一ッゆゑ信軍の中間傍合助言一ッゆゑ彼成部の
負ゆゑ一ッと玉服一ッゆゑ重ゆゑ助言ゆゑ討捕ゆゑ
一ッと云所ゆゑ又助言一ッゆゑ負ゆゑ成れハ此ゆゑ
塚ゆゑ所ゆゑ御ゆゑ長ゆゑ名ゆゑ中間ゆゑ切殺一ッゆゑ此駿
動ゆゑ家長何某二階へ上ん階子の者ゆゑ中間
の者ハ家一ッゆゑ郎駆上ゆゑ梯子ゆゑ踏れハ志

つゝの話とゝ扨相傳繁と討しるされい自殺
せんなれとも　御上より御制法と伏を用ゝて
いと尊常と御下知と相待ゝ折柄只那ハ御用
ハ出席の留ゝ被れい為き此由と告ゝ
御下知と相待ゝハ云相迫所
情何卒と御ゝ人ゝい夫限ゝ御歎せ可
云遊評義ゝて御目付ゝ家長迄其由内ゝ云含く
出奉ゝすゝしゝとも本人中ゝ義引ゝ
云ゝ孫左孫の如ゝ早那孫御雑義節
ゝもやとゝいれ切ゝ付内ゝゝて　弓恵ゝ遂とも

云ゝ竹せられハ雑者ハ年頃つとも人と殺害せ
しゝ故御懲繁ゝ切腹云仰付云下ゝ付男
ゝる身ゝ奉望雑者年頃ゝ付　貴殿ゝ嫁
ゝ御下屋敷ゝて切腹致ゝて長崎ゝ御
ゝ御ゝゝ

○安心様御代御金方役ハ金銀ゝ付一流ゝ物定遠ひく
と云　同役四人ゝ者一時ゝ永ゝ御暇出ゝ旦
那寺ゝ銘ゝ云退ゝ申ゝ佐賀又左衛門と云
者ハ法華寺旦那ゝ彼者ゝ引取養子ゝ致ゝ云
退人ゝて所方借後何系ゝ云形ゝ断ゝ私ゝ用

言せし所に因役に人は情勝寺へ寄合いろと
示合せて又左衛門と呼寄る又左衛門何心か
く第一所と左右方を取りわかつて本堂の柱
に縛り付て弓張提灯を盗取りしふとり我
々は御暇を下さるの心外の方へ因く逃去と云上
し立退こうて傷を合ふ本拠なく散こうに郷
に此由又左衛門の家屋敷取敷行く家来伝吉久米
に助の暇為へ知せられは退取刀に情勝寺
へ駆付しに三人に者門を閉うまは門
外にて口論に寄と中のこせ人方なし者と及
く此寄へ小児の葬礼に早迫られは潜り戸に開
けく通しける余人と乃きして相手に人の内
を人に門の脇に立向ひて待掛るに久米
に助は此様に引除ひて二尺三寸に押入られは
待受し男久米に助に切掛しに早すく刀の切
先きを扉に切付しに変に久米に助は抜に一
あく搭く本堂に駆上り此男も追く駆上
り相手は三人に久米に助を人にて追つ返つ
切法ふ内又左衛門は堂の柱に縛り付られあり
に只相元のめくうて打し久米に助の運や強り

り名乗り合ひ敵の人討留殘る三人は深手を負ひ
庫裏へ逃行くを追かけて二三段駆りて倒
さんとすれども久米三郎は兄の孫四郎と切
合ひ松三人の死骸をうめとせし我身も數
ヶ所の手疵を上り合ひ敵は討留めぬきは心のゆる
うるもの物ともいはず成されば兄又左衛
門様〳〵労りて久米三郎と肩を並べ法花寺
へ立退人を寄町へ出るを待て乳を取のかせ
て松源院の前なる板橋（ばんかう）を渡るを久米
三郎と頃なるを大溝へ倒きぬるやうにして

て法花寺迄引取りたれども手負の上に疲れ
れば次第に窮屈成しとて此由御上へも
申上られれば御手医師元伯甘竹と療治されと
も久米三郎は翌日相果しとなり於
御上も久米三郎は御情遂されしとて又左衛
門は此次第法花寺にて自殺せしとて此時に
久米三郎の働き感せぬ人はなかりしとなり其
比迄風聞せしは此騒動の時備後殿の孫の
代の果彼は浪人者にて有しが祖の世話にて
なる法花寺なれば久米三郎一人に相手三人と

必ず助太刀せんと思ひて潛かに播磨迄へ入込
扶のものあきい堂の隅々隠れ居る程なく相原よ
り助太刀せしが久米之助は雜と仕果せしと
あり其時代きは世上共くうゝる気質の者の為
なりしとあり
此話と付く之浪人のすい元備後國成家の名士
郷左衛門なる者の其性質常に陳ずるを
是ヲ異名して深垂鑵子唱へるよし或時剣術の
稽古場にて師匠なりける男の此名者を志ある
婦人ありしに此名者深く恨て師匠を
てあらんとあるに師匠也も其編と拵意仕
あんとのひ置りれは相弟子中も例のものと
思ひ之扱ひと入るもそこ〳〵にて雑言交
りこいひちらしれは名者奈服と云へ
我等義は所存と完の名明夜於河原出會の対果
之旨果状を付ありける相弟子中こは諸用
銀拵調きりて師匠に仕候は彼名者の対果
其場へ立退居と同之〳〵河原と出會ひ
剣撃うれひなる彼名者贔口と一刀切〳〵
やがや今は其也と思ひて跡也〳〵代り付き

何ものかとりけん彼師匠鞘ハ口をけ口潔く一
刀を伐り伏せり此者日頃の背憤を一時に
晴つ今ハ男ひ奈くるものと犯顔に腰ヶ切
腹せんと仮をさをられい笑うを取のかやく
臓腑ともに膾に込のけ下部にハ何も殺りられ
はいわく是まてハ仕損をへしと思ひ氣を押
静めく後よりうつ舵と思案をまは切腹せる
る何時にても安まるべきハ是ハ立退んと思
ひ定め疵口を鉢巻して此場を逃去らんと二
里半隔たる在ひに此者の伯母の獨り住く居ハ

るを心当に頼も二更過る比彼所に所行く戸を
打ちて声のしくの中を告られい老女ハ物を怪
く心ばりたりのまて居りは身を変て
先ッ外面に待迎なりて客と裏迄して雨戸へを
上を通りく湯戸の方へ思ひ出せ人の足ハ血と
汗せとの為なり相成明られハ御名前子ハ
いまハ土蔵子後の討きてうを見るとと河原に
至りうまは所もの事にて赤中雪降四五寸
も降積りに雪の中に物したのまと打寝をえ
てれいおいいりふ討きてうハ師匠後くうを

若子の利〻所人と云ふ友
達の中と彼仲母の里と知て若狭へ志し行
られい言葉て其跡消るふ泊無い家を〻ゐ新
〻まて有〻れい所を〻へきやうなくて夫限り
こ事い出さるるとそうるるまて男ゐれた
此度の助を刀をも志〻めとつひ宮ありとそ
返〻も志いあり〻いせねるそ土薩ゐとて
も沖の有〻ぬ物と長崎ゐ西物語〻
○此話い今法〻〻の大喧嘩也予或時幡勝寺持
予の祖父〻立寄庵美林と云僧ゐ高松藩の家老方副翁の室ト内縁ゐ有し の内

法〻ゐ〻ふ〻時の住持祖信〻て番図引被り
て振れ居〻り坊守〻い永文の物へ〻て難刀の
鞘と〻〻引提〻廊下〻法の中ゐと掛〻名方
所常の勝負所迄只届ゐ〻法と云〻只和〻〻云
上〻〻りと〻仰〻と有〻〻物又ゐ有〻い法花
寺只那〻所〻〻所浮寺只那〻と寺とそ○一
説〻佐世又ゐ有〻い法人大阪戸〻松平越中守塩
ゐ箱入〻御小袖ゐ進大阪戸〻鉋ゐ再御用〻郭
箱ノ内室〻内ゐ預ゐ〻〻ゐ人御暇〻佐世い勝の
愛妾男〻て居〻〻と寺〻久米ゐ助い御側小姓

の由其他ニ姓名ハ不知と松本忠篤語りき

○明暦三酉年四月十八日十九日ニ掛の江戸市内ニ大火有之三年目ニ当る子年四月院建酉年焼ニ人ノ墓地ニ

此時

安心橋御所ニ蒙

仰前日ハ大火ニ而上下共ニ食事ニ乏しく清十九日夕八時ハ上野東叡山院御入ニ時人馬共疲き果上ル御成搭ハ御馬一疋ニ不進此時山口藤兵衛取御馬ニ口ノ取て引立先ニ九ツニ清御供ニ乗り御馬の肉尾ニ盾と入く押上しく御宿坊ニ入りしと夫ハ上下

食事ハ大ニ疲れ果く唯前後も伏りる此時御曲輪内焔硝蔵ニ火移り其響百千の雷のめく江戸中震動せしく知ル人ハ知ル様ニ有りしと云伝ふと長政五位切語りき

○安心橋御代淀ハ物ハ百五十石御奉行役ニ不足ニ而押ハ御暇の願差出せしに時節の風儀ニハ ケ様ニ新ニ有切腹ハ仰付ハ有て者ハ一淀の預ハ主ハ池内新右衛門尾ニ切腹ハ仰渡ハ池内新右衛門ハ酒肴ニ為持為暇ニ出ス惣ハ家ハ一ツ宅ニ行しく業内ニ云入さ成れ

ハ毎夜家門ハ出入ニ所人と囲碁打く居より
一の路所人問く何ニ御用ニて御頭ニハ云成出
出ぬそと云れハ毎夜家門ハ若ニ拙者ハ朝
段切腹仕ると云仰せ聞ハ其所人色を失ふ
て逃帰りしと云者ハ出家中ニも和歌ニ長き仁も
多くて今様ニ和歌ニ長ク知きさるしかの今の
代ハ其事ハ有て為きさるも即時ニ腹切ると〜一物
武士家門暇乞の挨拶ハ大ク酒飲まもりの湊も快
く強く知ぬ此度押付ニ御暇を願ハ上ハ
ケ様ニ仰付と兼ニ為く主命ハ御頂と初代ツ

て代り死との覚悟ニ御頂し御威光ハ拙前
の物ハて尾朝ニ仰付し新子細も有ニ御頂と根
ヤ子ハ有と存上りくれと云ひ〜由主暇願
ニ切腹せしと有り仕方の初後有り
拙ハ何未所ハ家門毎夜新居を出
本國虎猛御代ニも湊ハ無ハ家門ト云大月附
有り拙ハ仁の後出立ニ成〜ハと仕出の
物語有り

○吉山権七と云ハ馬術の名人有り
安芸猛御代御馬見ハて御家馬ニ長き〜時権

七やうと羽織を脱ぎ捨てゝ走付く早足下りさま
ゆ、其馬揺姿を見くゆと云ふ伯と御馬の
次と羽織おきせてやうしかと此馬怒り驚き
ゆるとなん

按揺姿を見るとは世俗云ふ所の障魔と物
室中ヲつけるを馬の見まは怒り驚るを云又
揺姿風と云ふ馬の急症にて手近き所稲荷
主馬の秘書中にて見まは唯馬の妖死と是石
囊の害と為次所にと着破せる故と療治方法
り異常、調息ありて無時は石囊の症ひあり故

に揺姿風ハ無支多くと云ふ

○此權七ハ蛇術の名人也御馬見所の出をして
御堀を鴨を打ゆる時松の蔭とすせゆるのハ馬
に後を付るを俗ヲて放しゆれハ頭に当りて鴨
と為ふり行方く早く放せるを御所方ゆれハ
箇口ゆを糸篇を引ハ放しくゆと御差ドせ
ゆ或ハ板戸を打て真正中也しと云伝

○平郎ゆ一名糸ハハ氣多古基六なゆを信ト也
ゆ名業くハ心流剛術剛流柔術賀伊ゆて
数多ゆ柄有し者ゆ後所同心と云名抱ゆ

其後高橋伝四郎殿と云者杉森山にて悪事者
発さすり関門の中孔心寺にて故有て子の妻心を
殺害し十二三歳の男子者を召伴て一向所を
取り殘りを捜使らし所月附富潟仲右衛門
捕方い所田心山本伝兵衛殿一族郎党
ハ去者の役にて羅越しふ山本高潟に向て密
易に捕縛しと云高潟捕縛者に郎に所に
れい強盗捕に不可ならて者に御也一向の証拠
計明にし所と云所に伝兵衛殿振没する服差
にて伐れる所と云伝脇貞と取縛に捕伐也御

ヲ付しと云伝四郎殿宅ハ今の中村嘉六の家
之と云ふ（子の隣家なり）叔夫より夜に入演場に引切
りる○其後ハ西社川の裾小の方に代りしと
云昔ハ東御門の前通演側に獄門を晒しりると
云のなりの浅川の小徒還の弄松演側に
さらし物郎ハ首討んと刀を抜とひしに
縄取し桃灯持も逃去しのハ管夜と成名郎石取
散首と思しきものと討られい頭より二寸ばかり上
り頭と切り其一太刀にて向ふへぬめりしを押
へく抜首にしりる者ハ大覚なる仕方と申伝

せしとなり邪郎は生後是程に成り或時所用勘
解由左衛門の家の若党高麗右と傍輩と討ち長
脇へ取籠りしに邪郎と捕手に成り付彼方へ行
くに先の長脇を窺ひ内の様子を窺はれば戸口の
内に抜刀を構へ居よりし邪郎は傘を持ち戸口
を明らかに取ると斬つけ傘を突出せば抜後を
切りて傘へ切込を透さず飛出雑方へ捕し
と又成時左武として葛西領の御領分より御年
貢代金出方に成る更取邪郎中間を人連行きしとも
中間病気にて邪郎外出の留守中葛西堤にて長蟹

の大男大形差差して立向ひ居るを邪郎は行
違ひさまに取ると斬つけ彼男を泥田の中へ投
込て通りしに彼男起上り悪口雑言をひられ
ども是へ応れ相手に成一ーといひられは大男
は御堤に来ふ御ーー邪郎は為かなく御ーーとなり
○桜葛西領ノ寛文五年乙巳六月
安心様大御留守居役蒙仰葛西領壱万石御
加増也後御三代目に五千石新増様へ御分知幾
五千石は元禄十一年御用地に付於字摩郡五千
石御引替に相成る又曰古老六と世人ノ咄伝ー

ハ元祖ニ子ニ成時前代の基六ヲ為シ元祖
ハ九ヲ生情業長二代目基六景張ト首ト云九郎
ヲ情初名基六ト云シ如当の書
○安心様島方御前様時品郎ヲ一ツ彩ハ氣
色基六ノ器量なり猪の首ヲ伐為セリ手傷ヲ
拵懐加増ハ甚ハ少シヲ一ツ彩ハ一生教ヲ
ヲ拵故隠居の所一人扶持ヲ下シ給
○氣多ク生情一洞隠居名ヲ一ツ彩ハヲ寵愛の
ヲ解釈シ申ス不和ト成シ由ヲ去ヲ一ツ彩ハ
ノ病気大切ニ及シ時ハ一洞見思ヒ行シ給

夫ヲ沙汰ニ如何なり
按此御物ノ何年ヲ知ヲ延宝四年辰正
月島方御庫様ヲ為ノ居ハ　嶺香院様御代
なり第ヲ書
○扨ニ云島方御様ヲ時御家光節新ヲ彩ハ猪ヲ
切シヲ豆場の恩ヲ忘れも二足引ヲ逆持
の中間只那ヒ者ヲ少シと奇ヲ為ヲ唯
豆場ヲ見事ヒ為ヲ二ツ切ヲ猪
の所四ツヲ成シ
○安心様御代洪水三の丸御堀ハ切ヒ海ハ流

る故に城中三ノ丸通御殿らうしふ気毋甚六二代
目景張の素禄に合功芸を指て御堀の豎川なるを游
き越し御城へ御機嫌伺に出しとく風説ハ只今
の富潟仲右衛門の伝聞なりとつふ此甚六の乳母
ハ小田原より附て来りしの甚六幼サの時已の
巷に附て常に御堀を游キしと云因て甚六ハ水
練とゆうしとく

按　本智院様御代花井源左衛門三ノ丸御堀に
て溺死す文ハ此切の練御停止に成しとそ

○甚六の家に伝ハ曾原あり畑の端にて風と称
せしとそ武道者の心切なと云物常に馬の背と
造り居より駿ハ豎なりて曾我の時山里の様
なりて紙袴掛りに駿を結して出しと云常に草
中着に歩判を造く佩うり何時なりても出
御供の用意なりと

○安心様御代定府に春日半十郎と云者有り剣
術の名無なりしが科有て故に討に成しと有く
大塚伝兵衛の中島半十郎と云者人の蒙仰其
夜春日が小屋へ行ける春日も何と有く心附
なりて討つき様の事なりける歌文に燈火とりき

ゝる所を中間物右ヱ門ゝて切伏せられるとそ

○本殿院様御代村越安右衛門実子又助ハ馬荒
者ゝて動番を交ゝ後も思ひて来りゝ物語ゝり
とゝ共ゝ高ゝ後の安右衛門養子成ゝを附視ふ
由聞えれハ敵ゝ討ゝせようとて所同心者人に
ゝ付き人ハ名を忘れゝ一人ハ山本伝左衛門
ゝ武年の者廣島ゝ又助宅ゝ来ゝ能ノ口ゝ入ん
とゝる所を門前ゝ何者ノ来ノ右ヱ伝左衛門二
ノ太刀ゝ仕留ゝるとゝ沙汰ゝ多和後ゝり
○定房様御代のゝ為ゝ云外様の
者士御城ゝて留番ゝて居ゝる者人ハ腰の思
ひを心ゝ居ゝる者ゝ人ハ力士ゝて力自慢ゝ
て如何ゝ人ゝふゝ費様早業ゝ云とも我此
ゝ者を留めゝる時ハ如何ゝも戯ゝ左
右の脇首をゝ取ゝと留ゝれハ此男者ゝ云様ゝ
ゝも此を留ゝ来ゝれハ者ゝ様ゝ此を
のゝゝみゝゝ人ゝ時ハ其元の胴ハ二ツゝなるそ
と云其力士の云様足ハ金の戯ゝ後の切るの
ゝゝふゝゝハ非ゝゝ様ゝ非ゝ士の
利鎗を留ゝ来ゝて矢限ゝ原ゝ世上ゝい

なる時は御年出れ勅ならんきや脇なる人後ゆ
歩に按ずるとなるに力士もさぬ〳〵と流れ
ども中に空入聖受体に逃れい今いせん方なく
て此力士大声を上るやレ人殺まわ〳〵と罵り
れは諸書年に御内証へも空を度りて人に寄
来見ていハ又驚きなりさぬ〳〵と扱つともふ
空入節まは御なる此中入御驚なるなる出人共其後
なて御前へ引出出旨御意と仰つは色を取
なりなる引出さなり御歩歩と御扱ひ立遠て
御前なて中歩なの歩を仰付事なるなる個りん

るなるいとをなるくもいと難有哀なり
按扱ひの歩ハ歩も跳子し二ツ切なる双方共
なる頃なる指せハ歩なる変なる頃扱なるなる双方牛角
なるなるなるなる変和方ハ御本丸二ノ丸共二番
番所なるなる
天和二壬戌和田倉御番所御勤より江戸なて
も国家なるなて写法御丸御番御処所なる云

今治夜話巻之二

戸塚政興撰

○本智院様御代町奉勘解由左衛門隠居名ハ め山七百石今ニ鱸屋敷ニ居ル或夜座敷ニ寄合ノ客ハ奥山伯玄江島吉助ニ進井上玄閑ニ助ニ進ハ用ノ事ハ有リテ其内ニ夜更ケノ事ニ玄閑或ハ吉助ニ根ト仲間ニテ掃ク声ノ怪シキ事ニ驚ク鳩部屋ノ鳩群リ飛ブ厩ニ馬嘶ク様ニ成故ト ふ事ニ知レ誓ニ彼ノ家根ヨリ人ノ落ル

窓の一ツれい立窓より驚きて出て見るに
山の家の長へより其故と尋れい家の前より臺
所へ立一か家りて物騒敷ケ様の時ハ用心
さへき事と存し長脇ハ刀を取て来りしゆ
掛て只何とあく室中へ引よるとあせ一の此家
根へ落れいと云其訳ハ何も変りしなハあり
りしと沙未公山物語あり
○所中如山い振舞て行とも先きの物と泊へ
宿く取ヨやりく我りくへ一杯とも弘めける我
俗名人へしとそ消の老女何来とのふ方く

巻のるあり〳〵用意せしと解云の御案内あり
一
○松本多仲社前の石ハ多仲石ハ大石と三ツ
為掛るものへ皆小家の先祖此石と居へける
所く
安心様御馬見所御ゆり掛て入　御馳走
立家の　御拵図りて出来るくといひ伝へ
○安心様い国治の武御舎行ゆ　塀所
坂ノ下の本陣大作屋の庭　御立祖様の御墓図

の庭にと云此事或年世降惟政此驛の沖先嘗勅
し時亭主の物語せしにとて予近年通し時うと思
ひ出く此路にて一説せしに彼地大火後
にて移家も新繕にて有りし頃木も大木い無く
るも一本にて有り扨此頃南向の社家にて門
ハ自然山の松山に塀の外面ハ高く流れ岩
河なり庭ハ三間に六間程の平地にて西向
の隅に芝付にて高サ尺五寸程の岡有り高サ五
尺ほの樹共淺く植込く作り木に頃中に器の祇
園山石の燈籠三本有り其の陽殿陰殿有り

とも設有り角に手水鉢の樹高木此木無葉も有り低
き木又ハ下草なんと有此遺りも芝付にて岡の
高サハ寸許にて長く路の中央ハ礼石と西の方に
り花ひしくに七八ッ植ひしくに樹葉閑にて東
ハ流れ有る扨山ハ自然山を用く路ハ洞の流
に象りにて有らにて多地理にハ新に
そなへられと思ひる扨此礼石を能く植ひ
るものに此をひ植ハ所の子細にと問と業
因せ一男の語りき此手水鉢ハ文字にて有り
只語る事なれハ図せにて一事にて殘にて殊更

れ

○島方仁江村の大神宮ハ廣さ
安心様御指図の樹十弘ゆの方ハ二三ゆ拾
ゑ
○國分山の獨樂寺（近年寺号院と云）の廣義路口の外ゆ
向ゑ濱側ゑ壕ゑ掘れ今ゑ立てゑの廣の中へ見
越しふ樹ゑる松有り高サ弐尺ゑ程り四寸
程有る樹ゑ枝ハ強く入ゑ三蓋付く有ゑり此松
ハ
安心様濱遍ゑ御見立ゑ有ゑれハ御殿場

こ此所ゑ神樹ゑる有ゑ今ゑサキ変ゑと此木の
本ゑて鉞ゑのハ拾ゑり有りき迷年早ゑ枯ゑり
とゑ惜ゑきゑ
○御廟所ゑなる楠の栖本ハ
本國虎様山里の御廟ゑ愛ゑ玉ひゑるの故ゑ
愛ゑ移ゑ植ゑと云ゑ本ゑは拾ゑ
○御初代様の時森川与右衛門十七歳ゑ御家
光職勤ゑ式時ゑ御様ゑ土佐山境月論所ゑ事ゑ
付御使者ゑり御重役ゑ對話ゑ有ゑの事ゑ
有ゑり○所ゑ御ゑ家ゑり御名ゑ加ゑ御望役ゑ

ばかりなる○若く云ひ合せ等当時番役に成り
ハ二つ家うと相口上書画図面お教こ出付持参
ら入れ〳〵る演達ら趣逐一乗込ハ上ら可若年ら
事故心得遠もハ宮部様御在口上ら趣可申出ハ
問屋ゟハ一つうて逐一二口上に演ハ御書付ら
ゟ及触答兵隊〳〵二付出使者も驚入感心せり
の相強足ハ士卒人数ら決なり
○寅永西様の改今治三万大とら〳〵ハ永井甚ら
博西村ゟ統石原大参の人ら命の永井ハ旅宿ら名
而の降宮〳〵ら時分風名ら傷撃の入

ゆ〳〵ら有ら出ら内様〳〵元入〳〵とら西村
ハ同居の書生の豚伝を振り〳〵ハ彼も力量有
ハれハ足と通人とら有ら出と放さと流く引メれ
れハ書生怨ら絶入〳〵ら有ら右原ハ常ら手拭
を絞ら〳〵振ら〳〵の触の様共振り〳〵乾ら〳〵
○高木社家の手ら石ハ八人掛りら〳〵永井西
生徒六十余歳ら〳〵此石ハ〳〵ら有ら〳〵仰〳〵丈
ら病気参〳〵果〳〵ら〳〵ら〳〵ら〳〵ら〳〵ら〳〵ら〳〵
ら〳〵ら人の手〳〵ら方別箱ら相様〳〵
○野村ら貞常林ら画青木社〳〵大森新七兄女と

頂に図のり情勝寺鐘撞の天井に九竜と画く法
界寺村氏宮に鎮西八郎為の鳴に成し図図ハ
牛岳九僧正坊に図ありし右図筆に○常光寺本堂
中間に天井雲龍と画しハ村瀬河某とり云り頂
の鐸あり○日展せしとく○法樹寺供ハ今沼に
出画師に初代と竹本氏と云
○蔵安東禅寺本に下某河堂に蘇堂宮内サ輔事
絵に絵馬墨画に席のり筆者知
○今沼に日記の名高き物に古石井家なる
日記譯あるものに竹仲秘しく他に見せ

に竹仲秘助なる〇〇〇原永翁の日記公私に有り
とりの素堂覚書連に有り一宮僧なる〇〇日記先
ハ此国家所奉行に関社に此日記ハ若河と安国
のに有て見せしと市ハ例なるに愛とし歌
きに有るの是も公私と書文に大帳の日記に
ありり
○享保五子年九月江大坂道頼堀町人門前に帳
面冊六冊搭垂与四越智郡と有に石井家古家〇
河内国〇に下市形に帳面に古代四五十年
前に帳也宗〇帳交り又ハ三十年前石井時合地

手代帳も有る由なれハ掛屋ハ之を探ひし所人ト
交取しとゝ也ハ康永翁の出日記に所り出雲に
日記日大坂にて本田摂津守浪人淺野吉良取居
忠臣に一奉と太平忠臣の一作り出しの外流
行三拾貫目手賣出し所書物人に姓名明白
に書出せし加藤拔に元仰付真上田紹義茂秀及
古の類を改の由仰付大坂及古に賣買無
之由ヶ拔に成ると所方都宮田藏介盜出し大
坂へ出しとも一拔も買人迄に尋探ひ
ゝとゝ

○高濱哲左衛門先祖ハ尾丸主左衛門といふ
百五十石五人扶持の沖初筆に八幡の法幢坊の
中子にて能書の聞えあり或時彼家にて河内の
方に斉御世六枚の武紙二通をもらひ何も出
歟のものゝ

○坂部一三と云九人ハ丁寧なる生質にて常に
若き者に物語なるに我が若き時頃くの
事ゆゑ一と後悔の世のこと
世ものの語り草なり

按一三の心ハ実に皆雑さるべく出家ハ其後人

こんも笑ひ給ふと云内の咄しと云噺一言も云
ひくるゝときり寸惜哉〳〵

○青柳五左衛門い御擣場四方ゟ長縄板ヲ
男〳〵知り百五十石塩子青物千ヲ五拾石
て大目附勤ゟ規度弐百五十石賜り一時ゟの
載ゟ方〳〵五十石い〻の切〻是と放し知ふい
道に御又ゟふ所有〳〵硬ひく古暇願しといい
ふ方い　定陳塩　定基塩ゟ内河岸の浜代の事
り当の宗

○松原四郎右衛門ゟ久大目附ゟ蒙り翌日〻深
く御用紙ゟ受ゟ深御しゟと早川地古家の
りの沿きり

○山下伊右衛門氏明暑清の時古来ゟ墨打ゟる
ゟ反古ゟ細く捻ゟ張付其上ゟ墨打ゟせしま
ゟ今沿ゟ大工方ゟ此法ゟ用ゆ古来ゟ古ゟけ
沢ゟ見ゟる所利ゟり定ゟ号ゟ山下張ゟ云由大
工ゟ八りの沿ゟ

○東御門先年建替方し時ゟ古木ゟ柱ゟ四国
通宿の樂書多く方り墨書の古柱ゟく建ゟる
ゟ〳〵ゟ方同人りの沿きり

○大工喜八は功者の棟梁にて武時世に名ある
先年武者武名高く伴ひ体物示家と時道
にて殖業の本末本を忘れとなりて相業なして
体にて馬の毒極殖業の内本末を忘れしい
若りしと云者にて云は本末の相まぬ法者も
とふと高き者にて此内器者の相まぬ選所に
行にて真法教にあへとふ馬部例を見て此
人にて古今の名人に触に頼めと云やうて殖業
の所取さうくと告く時家に伝て相むかう教へ
言はせうとに本末と同所にて亟翌日用意

は相功者の交にあるとへ相内に又その案
図へ申しに所取来りて挙礼にて酒肴の
大にまして有にとへ
○馬を遠所に引申こはにて鋸の太サ口
に鉋張拵へ拵へにて上にて殖に張に拵
縄のとく磨をりて家口補に口補に力も附
けるとへ（馬を後後輝して内馬鋸用所所の名と云し男に）
若い宇摩郡にて原名にて物の張に
○国民名所の御家形系の人に（本智院御代）拵大塚
流馬術の名人に伴に御りの中に武者朝鮮馬

場にて胡蘇波りの荒馬を繫ぎ置き師匠曰驅を
進ぐるよと若主人鞍を驅せ出るとえ下
りて後の西の方に立て繰帰りて異域の馬の心も
知れぬ物と左鞍にて進ぶ事やうやうと呵ぐ進ん
るとあり教方実に尤なり始て岡氏の鞍
の源サモ思ひ寄らぬ哩えぬ珍らか物語
岡氏の秘伝を授ける養子氏なるべし馬術
名人故馬役蒙ぐ由彼と岡氏の馬役に名乗
抱ぐるに非れとも
○戸塚歩行の代り江戸にて御り者乗抱ぐ駕籠

に乗きひりる此男の常に子供を遊ばせりるか
書院の庭にて掃の芋拾取ちしく用を妙なか
せぐ事と打て用と呼ぐ物せりれば強い池なと成
く翁の乗るを掃ひく掃りせりる事を打い妹
のめぐ妹の芋ぐりと却附の子拾分ぐ
公儀出役者なり乗物ぐ出せとの厳命を受
つぬ望の命ぜられる五時ぐ来りる何紅と関つ
い昨の御役り者りしも難儀成
るこの非を云物命を蒙りぐ来と云る捕物
所を人に警固呈悔ぐ出紅しなる玄山仲ぐ

私宅へ出く形の上に遠慮なく者り物腰姿態と
と潰し格こゝろうしく宰へ入る道中も出行
さあれい宰を出く先へ立ち出く歩行る此者五や
ら我命に掛るゝと非礼ハ必逃走りハ不行気色
ゆゑ有とて幕府ゆゑ公儀へ少引渡出所入宰
しなる警固の物ハい手程四五せしゝ梅河岸
して彼男内と無く居る格子を見られハ宰中
気毒加賀数ゝ出なりとして此方の心きしの重枝
なりとく為ゑ此男の為ハ
器の傷へ引出ゝ時ゝ部とゝ肩々

れて指れハ紙ゝ為ゝ替りものゝ人遣ひ
ゝとゝて欺なる語ゝしとし怪なりの語
ゝ

○野田一入ゝ光へ所生政乱ヲ招請しく二句

勢めく新頃出ゝ浅き春の雨

夜明のあうぶひすの出よ四取持

政乱も感心ゝく君ゝき知ゝて此乱五の物語

楼拵ゝ紙ゝ学ハ夜明のぬいゝゝ

所望ハ此器自ゝ拵ゝ紙を引出ゝと感しん

○肥前ヲ稱ハ　安心様と申交代ヲ以ヲ江戸ハ西
海城ヲ守ヲ新宮内四郎宗忠と申仕居ヲ拵し
ヲ以ヲ東武ヲ守ヲ西附ヲ拵小姓ヲ人（其ハ姓小姓）
（ことを其姓ヲ知す）　此ヲ弟ヲ以ヲ出家し諸国行脚し
く後覚秀防ハ高橋村ヲ以ヲ一庵ヲ結ひ行ひヲ因
しヲ今ヲ其庵ヲ近年ヲ久賀年意行ヲ（梅禅寺の）
（子ヲ）住ヲ故今ハ年意庵と申ヲ長林坊ハ辻
堂ヲ住ヲ此堂ヲ長林庵と云額有ヲ御位牌も
有ヲ
崇峯院殿と申ヲ

○松源院ヲ鐘ハ　安心様霊夢御感ヲ仰
ヲ拝志村玄光寺門前ヲ土中ヲ掘出し仰ヲ仰の
古銭ヲ以鋳ヲ申ヲ
按ヲ若年ヲ入院振舞ヲ御ヲ此寺ヲ捨ひし
時鐘銘ヲ有ヲ時栽
○三ノ丸黄野村越（今ハ年地名有り）　崇ヲ長家ハ昔松源
院ヲ建立の時浪花ヲ大工請頂く勤ヲ入用
多ヲ引合ヲ不ヲ御ヲ宗村ヲ仰ヲ蒙り有ヲ願出
し御ヲ通ヲ長屋ヲ建ヲ有り退ヲ建替
し御ヲ今ハ二形ヲと（近年ヲ御ヲ建替ヲ有り）

○蓮堀の橋際なる袋所の六軒ハ桐本書院の出
長屋とし引く建うるもと云茶菅ゝく雜木柱の
手斧ぬこ望ハ大屋とて外面より望て地とす付
うるものゝてを有り今も云軒程ハ長屋ゝて
を有り。

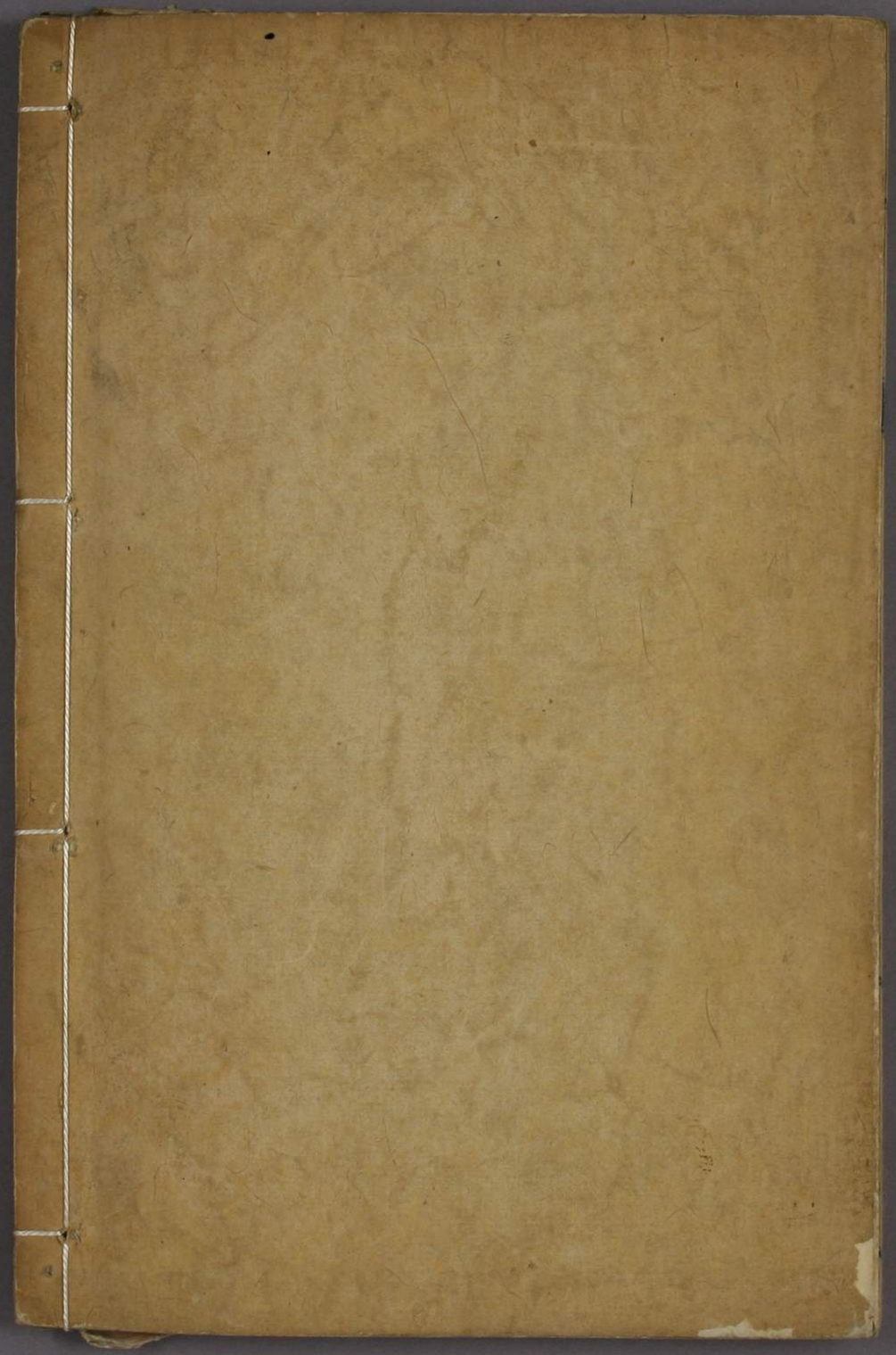
○國分山桐ノ本書院とゝふハ
安心様御隱居所のゝ淵を御代ゝ内より御茶
屋ゝ建ゝ是ゝうゝと見ゝ真所ハ世信ゝ云所
ハ表私御用ゝて所新倚ゝ時御手私ゝかゝと所
御使の者ゝれハ久松ハ右ゝ桐ノ本ゝ

院ゝ立ゝ御出ゝ遊ゝとゝゝうゝや
○御城御表所の見通ゝ八方ゝ激柱ゝて有
り今世大殿の席ゝ苦ハ此柱の所ゝ強ゝ者ゝ多
ゝ

○戸塚書院の孔雀ヲ一工一花ゝて手を以ゝる
細工也桐ノ本書院の孔雀ゝと鉛本云也相違
桜柱ゝゝ有ゝゝるものゝ
鴨居を除きゝ仕喰ワせゝ
但兄ハ桐ゝアラス檜ゝて
造ゝうゝ鉛物ゝ有ゝ

○松原の所々相仕立の障子有り相応寺院の相
応と云ふ伝ふその伝もあり
○城中井上の裡ハ乳岳八幡宮の旧地坂部郷の裡
ハ中陸子の旧地と云
仁江村の西さとツミと云所有り文字ニハ水九
のとうま所りそしと云
○河上安国寺作武時拝領之先多紀寺と塩瀬
築一説云所行条ハ白此所ハ大塩瀬と申ス塩瀬
ハ似寄の名と所ハ肩瀬なれ
未廣りしめくうれとやりて書くやれ

ちとうむ
按ずるに村の大池犬塚池とかうる所出来
池の名ニハ是ハ所かとうて学ゆるれ豊年の
ふりしハ八束穂と云ふ所あれハ稲束池と
いちんこそ勝りしめ
○伊豫然宮の神宮の内ニ一巻有り八景詩ニ
真題名のミ記し並ぬ
犬島帰帆　八幡山秋月　椋隈山晴嵐
曹溪晩鐘　高樓落雁　佐礼山夜雨
奈良原暮雪　黒河山夕照

黒河ハ知何處或書曰法界寺村黒川城主ハ
知ラス
○昔古谷村瀧宮神社再建有しハ成就して宮殿
し出とき時別當社人爭論出来て遷宮導師
ことりて出たる逃げたる遷宮ハ未成りし
く此論ずして願書差出す筆末も差建き者ども
或時村役人ども御代官所へ願出ける時願
書文に及ぶ御宮山行とて物騒敷うるしく村
中ニ有ト付ケ朝村役人ども一統ニ延しこ
のけ所處仮御殿ハ御神体乗ず出ひく御本社
ハ御遷宮ニ為去ハ不思議の事ニハ此段申屆
ケたるとあり実ニ行くうるの神なれハ神力ア
て古稀のものも出へしとて出儀ハ恐しとて皆ハ
皆ども深ケると仕出ハ出ず

今昔夜語巻之二 終